

対人関係と連想の構造

森 岡 剛*

はじめに

Galton 以来、連想とは過去の経験や記憶を再生する過程であると見なされてきた。イギリス経験論を背景にして発達した連想心理学では、複雑な経験を要素に分析し、この要素の結合から心理的過程を説明しようとした。要素の結合とは、時間的・空間的に接近の関係におかれた観念同士の中に形成されるものであり、連想的結合が形成されている観念同士は、片方が生起すると、もう片方が連想的に再生される。この過程が連想であると考えた。

連合主義の考え方を更に発展させた行動主義では、「刺激—反応」の結びつきの強さ（連合強度）によって、連想は決定されと考えた。連合強度は、「刺激」と「反応」を時間的・空間的に接近して経験する頻度が高いほど強められる。そして、ある観念は他の様々な観念と結合するが、連合強度の強さに従ってヒエラルキーを形成する。そして、ある刺激語が提示された時、その刺激語と最も強く結びついている単語が反応語として再生される。個人差は、形成されている連合強度のヒエラルキーの違いであるとみなされた。

連想は、過去経験の再生であるという観点から、多くの研究者によって研究されてきたが、こうした考え方では、最も一般的な連想である成人の範列連想でさえ説明することが出来ない (McNeill, D. 1963)。範

* 横浜市立大学大学院 国際文化研究科 人間科学研究分野
博士後期課程在籍

列連想とは、刺激語と同じ文法クラスの反応語の連想である。例えば、「大きい」に対し、「小さい」と答える連想は、形容詞の範列連想である。この連想は、従来の考え方によれば、「大きい」と「小さい」との間の連合強度は最も強いということになる。ところが、連合強度は、経験によって強められるものであると考えられているが、日常において、「大きい」と「小さい」とを時間的に接近して経験することはほとんど無い。そこで Ervin (1961) は、発話を聴取する際に誤った予測をすると、範列関係の概念同士が接近の関係に置かれ、連合が形成されるという仮説を立てた。例えば、「彼は身体が」と聞いた時に、その後に続く語として、「大きい」を予測したが、実際に聴取した語は「小さい」であったとする。このように、聞き手の予測と実際に聴取した語が異なる時、「大きい」と「小さい」は時間的に接近の関係に置かれ両者の間に連合が形成されると Ervin は主張する。McNeill (1963) は、Ervin の仮説の真偽を検証する実験を行い、Ervin の誤り仮説は間違いで、この仮説では範列連想は説明できないと結論付けた。

また、従来の研究の根底には、「連想とは、過去の経験によって形成された連想的結合の機械的な再生である」という考え方がある。この考え方が妥当ならば、我々が出来ることは過去を再生するだけであり、新しいことを生成することはできない。しかし、日常生活を振り返ると、人間は新しいことを思いついたり、芸術活動や発明といった創作行為を行っている。こうしたことを踏まえるならば、連想過程を詳細に記述するには、根本的なパラダイム・シフトが必要であるといえる (Clark.H. H & Clark.E.V. 1977, 川幡 1979, McNeill, D. 1963)。

こうした中、連想心理学の問題点を乗り越えようとする試みがある。それは、言語学の構造分析の手法を取り入れ、連想の構造を明らかにしようとする研究である (Deese, J 1965, 川幡 1979)。例えば、川幡(1979)

は、「連想とは、刺激語が反応語を喚起する過程ではなく、刺激語が範列（選択）関係の語に置き換えられる過程であり、また、刺激語が連辞関係の語と組み合わされる過程である」と述べている。このように、連想は、刺激語と反応語との間に形成されている連合に従って再生されるのではなく、連想の背後には連想を生成する構造があると仮定し、その構造を明らかにしようとしている。

そこで本研究では、連想の背後にある構造を明らかにするという立場を更に発展させ、連想は対人関係という構造から生成されるという視点から連想現象にアプローチする。

ビューラー（1934 [協阪ら] 訳, 1983）は、言語のオルガノン・モデルにおいて、言語の機能を説明しているが、それによれば、言語とは人間関係を内包した行為であると考えられる。また、メルロ・ポンティ（1949 [木田ら] 訳, 1993）が、「教育者と子どもの関係は状況にとって副次的なものではなく、それこそが状況の本質をなすものである」と述べているように、被験者の連想過程を理解するには、被験者がどのような対人関係の中で連想をしているのかを考える必要があるであろう。また、バルト（1964 [渡辺ら] 訳, 1971）が、「あらゆるものは意味の体系を構成している」と述べているように、被験者が答える反応語を記号として理解するならば、反応語は誰かに向けた伝達の意図を持っていると考えられる。

こうした言語学や記号学の視点に倣うならば、実験者が「刺激語」を与え、被験者が「反応語」を答える過程は、コミュニケーション過程であり、両者が交わす一語文によるディスクールであると見なすことが出来る。本研究では、連想時間の長短、および実験者と被験者との関係の変化によって、被験者のディスクールがどのように変化するか考察する。

実験 1

1) 目的

連想心理学の考え方では、連想とは、刺激語が反応語を喚起する過程であり、連合強度によって決定されるものである。この考え方によれば、連想実験の際、被験者の目の前に実験者がいてもいなくても、被験者の連想過程は変化しないはずである。

そこで、連想時間の長短、および実験者の在不在によって、被験者の連想過程がどのように変化するか考察する。

2) 方法

刺激語リスト 梅本（1969）や川幡（1979）の刺激語リストを参考にし、表1に示した40の刺激語を選んだ。品詞の内訳は、形容詞が15語、名詞が25語である。

表1 刺激語リスト

1 山	11 白い	21 遅い	31 楽しい
2 机	12 太い	22 サッカー	32 悪魔
3 甘い	13 化粧	23 キス	33 先生
4 男	14 電話	24 高い	34 長い
5 苦しい	15 寒い	25 私	35 母
6 秋	16 りんご	26 難しい	36 秘密
7 原因	17 トイレ	27 酒	37 暗い
8 美しい	18 広い	28 怖い	38 関係
9 満員	19 戦争	29 自慢	39 良い
10 音楽	20 桜	30 ナイフ	40 運命

実験群 実験者の在不在と反応時間の長短によって、即答在群、即答不在群、10秒在群、10秒不在群の4つの群に分けた。即答群では、刺激語

を聞いて最初に浮かんだ言葉をなるべく早く答えるように求めた。10秒群では、刺激語の10秒後に提示される「ハイ」という合図を聞いてから出来るだけ早く答えるように求めた。

被験者 被験者は、男子20名、女子20名、合計40名、平均年齢22.8歳である。被験者をランダムに4つの群に振り分け、各群男子5名、女子5名とした。

実験者 実験者は横浜市内に通う男性の大学院生である（23歳）。

実験の手続き 実験は個別に行った。詳細は以下の通り。

（1）連想実験：実験群に応じた教示を与えてから連想実験を行ったが、実験者不在群では、教示終了後、実験者はワンウェイ・ミラーのある観察室に移動した。連想実験の終了後、被験者に内省報告を求めた。

（2）文章作成実験：刺激語と被験者が答えた反応語をそれぞれ1つ順次与え、この2語を組み合わせる連想実験の際の連想内容に即した文章を作成するように求めた。文章作成の終了後、具体的なエピソードの有無によって、作成された文章を意味記憶に基づくもの（以下意味連想と略す）とエピソード記憶に基づくもの（以下エピソード連想と略す）に被験者自身に分類させた。

反応の記録 連想実験においては、反応時間と反応語を記録した。反応時間は100分の1秒まで読めるストップウォッチを用いて測定した。

反応の分類 言語研究と記憶研究に基づき、範列連想・連辞連想、意味記憶・エピソード記憶の観点から分類した。

3) 結果

反応時間：各群の反応時間の平均と標準偏差を表2に示した。

表2 各群の反応時間（秒）の平均

	刺激語					
	名詞		形容詞		総数	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
即答在群	1.95	1.48	1.64	1.04	1.83	1.34
即答不在群	3.11	2.63	2.74	2.13	2.97	2.46
10秒在群	11.57	0.99	11.40	0.76	11.51	0.92
10秒不在群	11.66	0.63	11.65	0.52	11.65	0.59

各群の反応時間の平均は、即答在群が1.83秒、即答不在群が2.97秒、10秒在群が11.51秒、10秒不在群が11.65秒であった。平均反応時間の差は、即答群においては有意差がみられたが($t=8.09$, $df=600$, $p<0.001$)、10秒群では有意差は見られなかった。即答群においては、実験者がいなくなると反応時間が長くなったが、こうした効果は10秒群では見られなかった。

反応の分類：表3は即答群、表4は10秒群における各刺激語に対する反応語数を意味連想—エピソード連想の観点から分類したものである。

表3 「意味—エピソード記憶」による各刺激語に対する反応語の分類（個）

	刺激語					
	総数 (N=790)		形容詞 (N=297)		名詞 (N=493)	
	意味	エピソード	意味	エピソード	意味	エピソード
即答・在群	321(80)	78(20)	120(80)	30(20)	201(81)	48(19)
即答・不在群	235(60)	156(40)	90(61)	57(39)	145(59)	99(41)

(注) カッコ内はパーセント

表4 「意味-エピソード記憶」による各刺激語に対する反応語の分類（個）

	刺激語					
	総数 (N=790)		形容詞 (N=297)		名詞 (N=493)	
	意味	エピソード	意味	エピソード	意味	エピソード
10秒・在群	148(38)	246(62)	53(36)	94(64)	95(38)	152(62)
10秒・不在群	298(75)	98(25)	111(74)	39(26)	187(76)	59(24)

(注) カッコ内はパーセント

図1は、表3と表4をまとめて図示したものである。

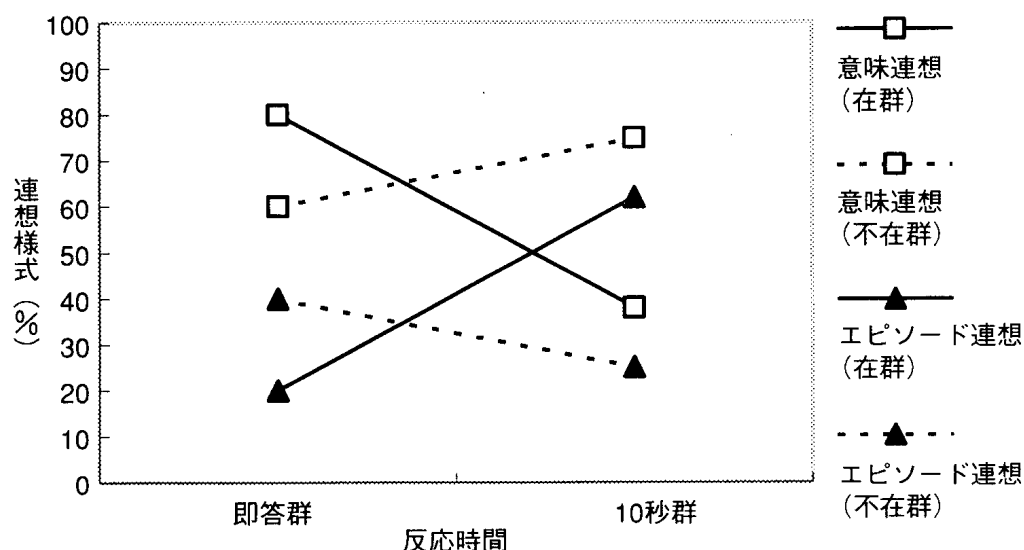


図1 実験条件と連想様式

実験者の在不在から結果をみると、在群においては、意味連想は、即答群では80%であったが、10秒群では38%に減少した。エピソード連想は、即答群では20%であったが、10秒群では62%に増加した。こうした傾向は有意であった ($\chi^2=150.90$, $df=1$, $p<0.001$)。

不在群においては、意味連想は60%であったが、10秒群においては75%に増加した。エピソード連想は、即答群では40%であったが、10秒群では25%に減少した。こうした傾向は有意であった ($\chi^2=20.66$, $df=1$, $p<0.001$)。

反応時間の長短から結果をみると、即答群においては、意味連想は、在群では80%であったが、不在群では60%に減少した。エピソード連想は、在群では20%であったが、不在群では40%に増加した。こうした傾向は有意であった ($\chi^2=39.22$, $df=1$, $p<0.001$)。実験者の在不在にかかわらず、意味連想が支配的な連想であったが、実験者が不在になると、意味連想が減少し、エピソード連想が増加した。

10秒群においては、意味連想は在群では38%であったが、不在群では75%に増加した。エピソード連想は在群では62%であったが、不在群では、25%に減少した。こうした傾向は有意であった ($\chi^2=114.11$, $df=1$, $p<0.001$)。10秒群では、実験者の在不在によって支配的な連想のタイプが交代した。

4) 考察

本研究では、連想は、連想の法則や連合強度によって機械的に再生される過程ではなく、コミュニケーションの過程であるとみなし、連想時間の長短、および実験者の在不在をコントロールした実験を行った。反応語の受け手である実験者が、被験者の目の前にいない時、被験者の連想過程はどのように変化するのだろうか。

実験結果によれば、実験者が存在する場合、即答群では、連想の支配的な様式は意味連想となるが、反応時間が長くなるとエピソード連想が支配的な連想様式になる。こうした反応時間の効果は、川幡 (1979) が述べている「範列連想から連辞連想へのシフト」や、森岡 (2002) の「意味連想からエピソード連想へのシフト」と一致する。従来の連想研究の用語を使えば、いわゆる平凡連想から個人的色彩の強い特殊連想に交代する。

しかしながら実験者が不在である場合、実験者が存在する場合に比べ

ると、即答群では、意味連想の支配性は薄れ、エピソード連想が増加する。反応時間が長くなると、意味連想が増加し、エピソード連想が減少する。すなわち実験者の在不在の効果は、即答群と10秒群では正反対の方向に働いていた。こうした実験者効果、ないしは実験者不在効果はどのように起こるのだろうか。

そこで、矛盾しているように見える結果を整理するために、反応時間を軸にして考えてみると、即答群の実験者在不在効果については、一見すると連想時間の長短に還元できるようにみえるかもしれない。各群を反応時間の長さごとに並べてみると、即答在群、即答不在群、10秒群、の順に連想時間が長くなる。そして、連想時間が長くなるにつれ、支配的な連想は、意味連想からエピソード連想へ移行する。つまり、連想は、時間を軸にこうした展開を記述できるように思われる。

ところが、10秒不在群ではこうした傾向は見られない。先に見られた傾向とはまさに反対に意味連想が増加し、エピソード連想が減少している。こうした結果は、連想を詳細に記述するには、時間軸だけではなく、対人関係の軸が必要なことを示唆している。

また、被験者の内省報告を見てみると、10秒群においては、実験者在群では「10秒の間に連想が次々とわいてくるため面白かった」という報告が多かった。しかし実験者不在群では、「10秒がとても長く感じた。刺激語を聞いてすぐに1つないしは2つほどの連想が浮かんだ後、何も思いつかず手持ち無沙汰な時間を過ごした」という内省報告が多かった。客観的には同じ10秒という時間を経験しながら、実験者の在不在によって主観的には全く違う10秒を経験しているようである。つまり実験者の在不在によって、被験者の態度や認知が変化していると考えられる。

また、実験者不在群の内省報告を検討してみたところ、ほとんどの被験者が「自分はどこからか見られている」と感じながら連想していた。

現実的には実験者は存在しないが、被験者は不在の他者のもとで連想していたのである。精神分析の観点から言えば、現実の他者あるいは不在の他者が、被験者の自我の防衛法を規定しており、採用される防衛法によって連想の様式に変化が起これと考えることができる。

実験 2

1) 目的

実験 1 の考察において、連想とは連想的結合に従って機械的に再生される過程ではなく、コミュニケーションの過程であることが示唆された。

それでは、実験者と被験者との関係が異なる時、連想過程はどのように変化するのでしょうか。そこで、実験者と被験者との関係が、同性または異性の場合の実験を行い、被験者の連想過程がどのように変化するか考察する。

2) 方法

刺激語リスト 実験 1 で使用した刺激語リスト（表 1）を使用した。

実験群 実験者性別と被験者性別による組み合わせによって、同性 MM 群（実験者：男性，被験者：男性），異性 MW 群（実験者：男性，被験者：女性），異性 WM 群（実験者：女性，被験者：男性），同性 WW 群（実験者：女性，被験者：女性），の 4 つの群から成り立っている。実験の手続きは 4 つの群とも同じである。反応時間は、被験者によって統制されている。

被験者 被験者は、男子 20 名，女子 20 名，合計 40 名，平均年齢は 21.2 歳である。被験者は、同性 MM 群において男性 10 名，異性 MW 群において女性 10 名，異性 WM 群において男性 10 名，同性 WW 群におい

て女性10名とした。

実験者 男性実験者は横浜市内に通う大学院生（23歳），女性実験者は横浜市内に通う大学院生（22歳）である。

実験の手続き 実験は個別に行った。詳しくは以下の通り。

- （1）連想実験：実験群に応じた教示を与えてから連想実験を行い，実験後，被験者に内省報告を求めた。
- （2）文章作成実験：刺激語と被験者が答えた反応語をそれぞれ1つ順次与え，この2語を組み合わせて連想実験の際の連想内容に即した文章を作成するように求めた。文章作成の終了後，具体的なエピソードの有無によって，作成された文章を意味連想とエピソード連想に被験者自身に分類させた。

反応の記録 実験1と同じである。

反応の分類 実験1と同じである。

3）結果

反応時間：各群の反応時間の平均と標準偏差を表5に示した。

表5 各群の反応時間（秒）の平均

	刺激語					
	名詞		形容詞		総数	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
同性 MM 群	2.83	2.21	2.63	1.83	2.76	2.07
異性 MW 群	3.64	2.77	3.22	2.00	3.49	2.51
異性 WM 群	4.58	3.40	4.32	2.93	4.48	3.23
同性 WW 群	3.63	2.63	3.43	2.45	3.55	2.56

各群の反応時間の平均は，同性 MM 群が2.76秒，異性 MW 群が3.49秒，異性 WM 群が4.48秒，同性 WW 群が3.55秒であった。平均反応時間の差は，同性 MM 群と異性 MW 群と ($t=4.46$, $df=761$, $p<0.001$),

異性 WM 群と同性 WW 群において有意差が見られた ($t=4.49$, $df=755$, $p<0.001$)。実験者と被験者とが、同性の時よりも異性の時の方が反応時間は長くなった。

反応の分類：表 6 は、実験者が男性の群、表 7 は実験者が女性の群における各刺激語に対する反応語数を意味連想—エピソード連想の観点から分類したものである。

表 6 「意味—エピソード記憶」による各刺激語に対する反応語の分類（個）

	刺激語					
	総数 (N = 794)		形容詞 (N = 298)		名詞 (N = 496)	
	意味	エピソード	意味	エピソード	意味	エピソード
同性 MM 群	300 (75)	99 (25)	109 (73)	41 (27)	191 (77)	58 (23)
異性 MW 群	174 (44)	221 (56)	70 (47)	78 (53)	104 (42)	143 (58)

(注) カッコ内はパーセント，
実験者は男性

表 7 「意味—エピソード記憶」による各刺激語に対する反応語の分類（個）

	刺激語					
	総数 (N = 794)		形容詞 (N = 299)		名詞 (N = 495)	
	意味	エピソード	意味	エピソード	意味	エピソード
異性 WM 群	185 (46)	214 (54)	79 (53)	71 (47)	106 (43)	143 (57)
同性 WW 群	281 (71)	114 (29)	98 (66)	51 (34)	183 (74)	63 (26)

(注) カッコ内はパーセント
実験者は女性

図 2 は、表 6 と表 7 をまとめて図示したものである。

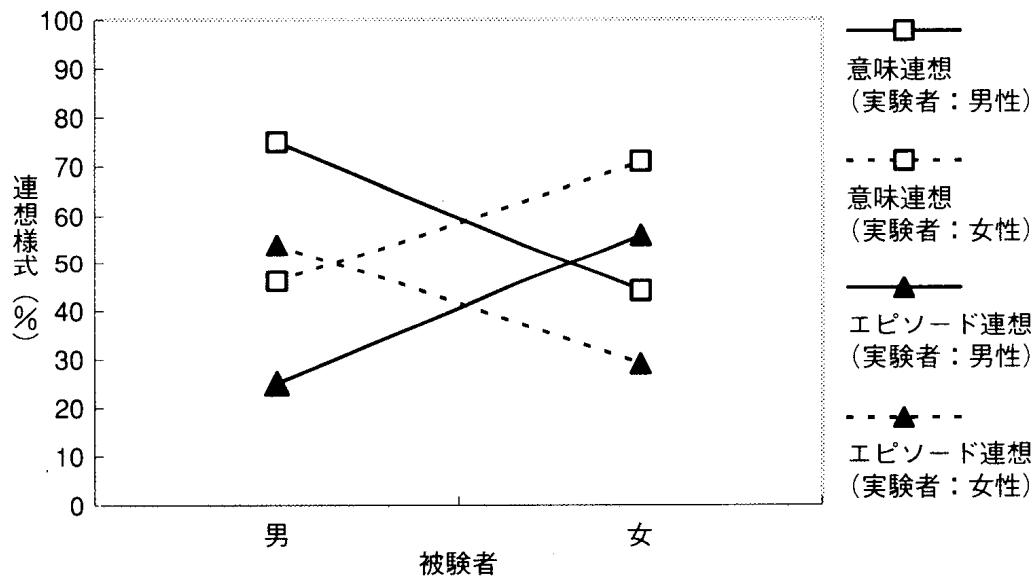


図2 実験条件と連想様式

実験者の性別の違いから結果を見ると、実験者が男性の場合、意味連想は、被験者が男性の時は75%であったが、被験者が女性になると44%に減少した。エピソード連想は、被験者が男性の時は25%であったが、被験者が女性になると56%に増加した。こうした傾向は有意であった ($\chi^2 = 79.99$, $df = 1$, $p < 0.001$)。

実験者が女性の場合、意味連想は、被験者が男性の時は46%であったが、被験者が女性になると71%に増加した。エピソード連想は、被験者が男性の時は54%であったが、被験者が女性になると29%に減少した。こうした傾向は有意であった ($\chi^2 = 50.24$, $df = 1$, $p < 0.001$)。

被験者の性別の違いから結果を見ると、被験者が男性の場合、意味連想は、実験者が男性の時は75%であったが、実験者が女性になると46%に減少した。エピソード連想は、実験者が男性の時は25%であったが、実験者が女性になると54%に増加した。こうした傾向は有意であった ($\chi^2 = 69.52$, $df = 1$, $p < 0.001$)。

被験者が女性の場合、意味連想は、実験者が男性の時は44%であった

が、実験者が女性になると71%に増加した。エピソード連想は、実験者が男性の時は56%であったが、実験者が女性になると29%に減少した。こうした傾向は有意であった ($\chi^2=59.34$, $df=1$, $p<0.001$)。

4) 考察

実験1において、連想とはコミュニケーションの過程であることが示唆された。それでは、実験者と被験者との関係が異なる時、連想過程はどのように変化するのでしょうか。そこで、実験者と被験者との関係を同性または異性にコントロールした実験を行った。

実験の結果によれば、実験者が男性の場合、同性 MM 群では、連想の支配的な様式は意味連想となるが、異性 MW 群になると反応時間が長くなり、エピソード連想が増加した。実験者が女性の場合、同性 WW 群では、連想の支配的な様式は意味連想となるが、異性 WM 群になると反応時間が長くなり、エピソード連想が増加した。この結果をまとめると、同性の場合には、反応時間が短くなり、意味連想が支配的になり、異性の場合には、反応時間が長くなり、エピソード連想が増加する。

このように、実験者と被験者との関係が同性なのか異性なのかによって、反応時間と連想様式は異なっている。従来の連合主義の考え方に従えば、連想とは刺激語と反応語との連合強度によって決定されるものであり、対人関係の違いに従って連想様式が変化するという結果を説明することは難しい。この結果を説明するための新しい視点が必要であるといえる。

こうした連想様式の違いはどのようにして起こるのであろうか。被験者は、目の前に同性の実験者がいる時には、刺激語を言語的に意味付け、異性の実験者がいる時には、経験的に意味付けていると考えられる。同じ刺激語を与えられても、目の前にどのような人がいるのかによって、

刺激語の認知の仕方が異なるといえる。内省報告でも、「異性だとやりにくい。ぶっきらぼうなことは言えない。下品なことは言えない」と答える被験者が多かった。こうした内省報告を見ると、被験者も、目の前の人が自分にとってどのような人なのかを意識しながら連想をしているということがわかる。

さて、連想過程とは、コミュニケーションの過程であるならば、被験者の語る反応語には聞き手に対して伝達の意図があると考えられる。川幡（2003）は、「発話の意味は、文脈、役割関係など言語外の情報が無ければ、適切に理解することはできない。発話は、「誰かが－誰かに－何かを－伝える」ものだからである」と述べている。つまり、反応語は、刺激語との関係のみによって理解されるものではなく、役割関係などから理解されるものであると考えられる。

ここでは、同性と異性という2種類の対人関係における連想について検討してきた。そして、被験者の連想様式は、刺激語の話し手であり、反応語の聞き手である実験者が、被験者と同性なのか異性なのかによって変化している。つまり、どのような人が目の前にいるかによって、被験者の態度や認知が変わるようである。川幡（1995）によれば、役割とは認知図式のことであり、被験者は相手に応じて自らの役割を演じ分けていると考えられる。

具体的には、同性の場合には意味連想が主であるが、意味連想とは、個人的な色彩が含まれない連想である。異性の場合にはエピソード連想が増加するが、エピソード連想とは、個人的色彩が強い連想である。つまり、同性の時には、相手に関心を向けず、自らを表現しようとするよりも隠そうとする役割を演じ、異性の時には、自己開示し、自らをアピールしようとする役割を演じていると考えられる。

以上のように、実験者と被験者との関係を統制した実験の結果につい

て考察してきた。こうした考察で明らかになったことは、連想は連合強度に従って機械的に再生される過程ではなく、コミュニケーションの過程であるということである。そして、実験者と被験者との関係が同性なのか異性なのかによって、被験者が採用する認知図式や役割は変化する。つまり、連想とは、対人関係に組み込まれているものであり、聞き手に対して伝達の意図をもった行為であると考えられる。

おわりに

本研究では、連想はコミュニケーション過程であるという観点から連想現象にアプローチしてきた。そのことを検討するために、反応時間の長短と実験者の在不在とをコントロールした実験と、実験者と被験者との関係を同性・異性にコントロールした実験を行うことで、連想過程を記述することを試みた。

2つの実験結果の考察から、連想とは、連想の法則や連合強度に従って機械的に再生される過程ではなく、対人関係に応じて生成されるものであり、聞き手に対して伝達の意図をもった行為であるという考察を得た。また、目の前に実験者が存在するかしないかという現実的な関係ではなく、被験者がその状況をどのように認知するか、被験者の持つ空想的な人間関係の重要性が示唆された。

例えば、実験者不在という状況を、自分を監視する人がいなくて自由であるとみなすのか、それとも、どこかで誰かが自分の様子を監視しているとみなすのかによって、連想は大きく異なるであろう。また、どこかで監視されているとみなしたとしても、その状況への対応の仕方も異なる。例えば、当り障りの無い意味連想をする人もいるだろうし、あまりの恐怖に圧倒されてしまって、反応拒否が増えたり、エピソード連想

が増えたりする人もいるであろう。つまり、被験者が現実の他者および不在の他者をどのように認知し、それが自我防衛にどのように影響するかを詳細に記述する必要があると言える。今後は、被験者の作り出す空想的な役割関係という観点から連想を理解することが必要であるといえる。

自由連想の心理学を構築するには、被験者の空想的な役割関係を明らかにし、役割演戯としての連想を詳細に記述することが必要であろう。

(引用文献)

- McNeill,D. 1963 A study of word association. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 5, 548-557
- Ervin,Susan M. 1961 Changes with age in the verbal determinants of word-association. *Amer. J. Psychol.*, 1964, 74, 361-372
- Clark.H.H & Clark.E.V. 1977 *Psychology and Language*,Harcourt Brace Jovanovich
- Deese,J. 1965 *The Structure of Associations in Language and Thought*. Baltimore : The John Hopkins Press
- 川幡政道 1979 反応時間と連想の構造 心理学研究, 50, 191-197
- カール・ビューラー 脇阪豊・植木迪子・大浜るい子 (訳) 1983 言語理論 言語の叙述機能 上巻 クロノス
- メルロ・ポンティ 木田元・鯨岡峻 (訳) 1993 意識と言語の獲得 ソルボンヌ講義1 みすず書房
- ロラン・バルト 渡辺淳・沢村昂一 (訳) 1971 零度のエクリチュール 付・記号学の原理 みすず書房
- 梅本堯夫 1969 連想基準表 東京大学出版会

森岡剛 2002 連想のメカニズム 横浜市立大学学生論集, 41, 251-275

川幡政道 2003 夢のロール・プレイングと役割分析 横浜市立大学論叢人文科学系列, 54, 123-159

川幡政道 1995 ロール・プレイングと心理治療 横浜市立大学論叢人文科学系列, 46, 123-146